



# ゲージ製造から超精密加工技術への挑戦88年を歩む

～戦後、超精密モータコアプレス金型にも独自技術の開発～

黒田精工株式会社 最高顧問 黒田 彰一氏

金型業界のスーパー紳士である黒田彰一さんは、今はすべての公私の仕事から引退しているが、ときどき、本社に顔を見せたり、関係する企業にも出かけたりする毎日だという。

### 金型業界の国際的な顔

現役の時には金型工業会の会長を2度、10数年にわたって引き受けてきた（1973～75年/1983～93年）。

その間、日本の製造業はプラザ合意（1985年）以降、家電産業・自動車産業はグローバル化に拍車がかかり始めた。金型業界も徐々にその影響を受け、海外にも眼を向けざるを得ない状況が出てきた。黒田さんも会長として、FADMA（アジア金型工業会協議会）の設立発起人・会長やISTMA（国際金型協会）会長、国内では「型技術協会」設立にも尽力され、協会2代目の会長にも就任されている。

今から57年前（1957年）の全国組織としての「日本金型工業会」の設立にも大きな貢献をされている。また、その当時、通産省では戦後の復興政策として“競争力のある下請け中小企業育成と社会的分業の形成”を目論んだ「機械工業振興臨時措置法（機振法）」を施行した。機振法の18対象機種として「金型」も組み込まれた。この法律が契機となり、これまでバラバラであった金型大手企業のメンバーが大同団結して「精密金型懇談会」を設立、機振法の適応の受け皿として1957年11月25日に、東京目黒八芳園で日本金型工業会の設立総会が催された。毎年恒例になっている「金型の日」は機振法がきっかけとなっている。

このように黒田精工(株)の社長という本業以外にも金型産業界の重鎮として如何に尽力されたかは、

語りつくせないほどである。

今回、新しい本社移転（JR川崎駅近く）の準備に慌ただしい中、黒田さんが2代目と言いながら、18歳という未成年で社長を継いだ、「黒田精工」という金型企業成長の物語を聞かせてもらった。

### 日本初のゲージメーカー

黒田さんは大正13年（1924年）、父三郎氏の長男として誕生、今年89歳である。三郎氏は1925年に東京大田区東蒲田で「黒田挾範製作所」という日本で初めてのゲージ専門の製造販売会社を設立した。

黒田三郎氏は1891年、福岡県三池郡で生まれ、高等小学校を出ると福岡県幸袋町（現在の飯塚市）にある鉾山機械メーカー（巻上機・選別機等）に徒弟工として入社した。年季明け後には三菱長崎造船所や、園池製作所（ドリル・リーマ・エンドミル）に独立するまで勤めていた。その間、早稲田工手学校で機械工学を学んでいる。

ゲージの製造技術を園池製作所で取得したことから独立することになる。独立当初は機械も少なく研削盤など高い機械が買えないため、工場の近くにあった東京高等工芸学校（現千葉大学工学部）を使わせてもらったりした。しかし、昭和期に入り軍部拡張時代になると、ゲージの必要性が叫ばれ、仕事も順調に増え、「零戦」の部品はほとんど同社のゲージが使われる。太平洋戦争に突入すると軍需会社の指定も受けた。製造したゲージ類はほとんど陸海軍に納入、軍の増産命令で従業員規模は1,500人くらいまでになったという。

### 学生社長の誕生

昭和16年に社長である三郎氏は、49歳の若さで

事業の成長を見ることもなく脳溢血のため亡くなった。まさに「生涯をゲージ事業一筋に尽くした男」だと惜しまれた。

長男である彰一さんはその時18歳で、旧制浦和高等学校の学生であったが、東京大学に入学する前から本当は文科系を志望していたが、父との相談の結果、理科系に進むことにしたという。

高校生であった黒田さんは、長男であるということから、父の急死した後の象徴的な求心力として未成年社長に就任することになる。しかし、未成年は法律上は能力が無く、実際の事業は「親権者会議」という数人の組織が中心に動いた。その中には岩波書店の店主岩波茂雄氏も加わっていた。親権者は父の友人や親族で構成されたようだ。

昭和18年には、「株式会社黒田挾範製作所」に組織変更が行われ、資本金98万円、従業員900名で社長は彰一さんだったが、母親の貞さんが代理社長として取り仕切る。会社の業績は皮肉なことに戦時下で増産要請が激しくなり、その要請に対応することに苦労されたという。

### 戦後、精密プレス金型も客先から要求

昭和20年4月の米軍来襲により、蒲田の本社・工場全焼、川崎工場の半焼。8月15日に終戦を迎える。終戦により日本の企業は混乱に見舞われたが、黒田精工もゲージ1本で生業を行っていたため、何で食べるかという深刻な事態を迎えた。

千葉県富津工場では鉄板で鍋を作り“製塩”やバリカンの刃物、オルゴール部品と長野工場は“電熱器”、さらに従来のゲージは自転車の宮田製作所から注文が舞い込むほか、自転車のサドル用の金型も手掛けることになった。長野工場では高圧トランス用Eコアの金型（鐘淵通信鉱業）、芝浦製作所小浜工場からモータコア抜き金型の仕事が相次いで来た。

黒田さんは昭和21年に東京大学工学部精密工学科を卒業。しかし、2枚看板で現実には社長の身分を持ちながら課長職扱いで富津工場の現場で働いた。

昭和21年になると日立製作所亀戸工場から日立方式の金型製作方式を学びながら総研磨型のモータコア金型にも挑戦した。

昭和25年の朝鮮戦争の勃発で、わが国はアメリ



カ軍の後方補給基地となり、日本は、自動車、航空機の修理、新製品供給を始めとした急激な仕事の増加への対応が求められた。ゲージに対する需要も増加した。

黒田さんは昭和28年になり代表権のある社長として一本立ちとなる。

昭和33年に初めてアメリカに行き、モータコア用精密金型の状況を調べた。当時、アメリカでは一家庭にはすでに15個のモータが使われていたが、日本ではまだ、2、3個程度。しかし、日本も生活水準が徐々に向上すれば、当然、モータの使用率が増加すると感じる。因みに2012年の精密小型モータの世界生産は107億個ともいわれている。

その後、ラミネーションモータコア抜き型の特許をGMが持っていたため、昭和53年に実施権を取得した後に、日本の家電メーカーへ「FASTEC」という商品名で金型を提供した。

昭和36年10月に東京証券取引所市場第二部に上場（資本金2億5千万円）、昭和40年には「黒田精工株式会社」に改めた。

これまで日本金型工業会の創立や“アジア金型工業会”、世界の工業会との交流に先鞭を付けられた黒田さんだが、間もなく90歳を迎える。今でも心配されているのは、金型市場が日本を越え世界に拡大したことから、そのグローバルトレンドに乗れるのは、これまで苦労して金型業界をリードしてきた初代の経営者でなく、2代目、3代目の若い経営者達であり、早く、“親父”を越えて欲しいということだった。(I)